

私が海から転業して富士食品を創業した時、小学校の恩師「鱸三佐男先生」が銭に書いてくれたのは「心に願いや望みを持つ者は足を運びなさい。その努力がなければ人は動かさない…」でありました。

私はこの訓えを忠実に守り、客を待つ商売はせず、足を運ぶ商いに専念致して参りました。その後、私が大変苦勞している姿を見て先生は「どんなに苦しくとも本業に徹しなさい。不遇な時には本を読め。」と励ましてくれたことを覚えております。

現在ではコンピューターから出る答えも、本から見る答えも同じだと言う人もありますが、コンピューターから出る答えは、データから出る格一な答えであります。

「本」は著者の生い立ち、経験、哲学等によって物のとらえ方がそれぞれ違って、想像、表現方法、先見性、時に夢、希望が全く異なり、読む人の感性によっては更に多様な答えになると私は思っております。最新のコンピューターでもリーマンショック、東日本大震災、アベノミクス、円安株高は予告できませんでした。

先日藤原正彦氏の「傍線の落とし穴」の中で、「最近の読書調査によると 15 歳以上の女子は男子よりも読書量が多く、男子は主にビジネス、趣味など日常の必要に迫られて本を読み、女子は文学、人文書と教養の世界が多く読まれており、男女の教養の格差が開いている」とありました。こんな時代こそ男性達にはもっと情緒感性が必要だと思っております。

私も戦後、祖父から「これからは学問の時代だ。本をよく読め！」と言われました。当時、河合東大教授の「学生に与う」の中に「本は必ず自分で買って読め！借りて読むな！」とあります。私は本を読む癖の一つに記憶に残したい文脈には必ずマーカーを入れて蔵書として残します。自宅の書齋に凡そ 3 千冊、土蔵の 2 階に古書凡そ 1 千冊所蔵しておりました。

10 年程前、土蔵を古陶磁器の収蔵庫に改装いたしました折、大工さんが「土蔵の 2 階の古い紙屑(古文書)や古本は全部焼却しておきましたから…」と言われてビックリ仰天いたしました。

戦後太宰治に傾倒して「斜陽」「人間失格」、太宰と心中した山崎富栄の遺作集等、初版本を所蔵しており、今では 1 冊 2 百万円とも言われておりました…人間の文化の違いの怖さを痛感させられました。

小さいながら経営者となってからは司馬遼太郎の「峠」と出会い、司馬遼太郎によって人間の生き様を教えられ心の支えを作らせてもらいました。藤沢周平、山本周五郎、宮城谷昌光、津本陽もよく読み、この人達には心を育てられた思いでありました。経営者は戦国武将と同じで常在戦場の思いが歴史小説を読ませるのかも知れません。

ローマクラブの「成長の限界」を読んで石油ショックを予感し、工場を大改築して大成功しました。

最近では藤原正彦の「国家の品格」は国民必読書と思います。経済著書、浜田宏一、高橋洋一、山本幸三、三橋貴明らの書を昨年 10 月以前に読んでおられれば、コンピューターより本の方が凄いことがわかります。今、日夜悪戦苦闘する男性達の心を休めてくれる本は中里恒子「時雨の記」です。毎年お正月には 1 月 1 日発行の「文芸春秋編の日本の論点」を読まれることをお勧めします。